



敷居谷古墳群発掘調査報告書2

1995年3月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例 言

1. 本書は、平成6年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した住宅団地造成工事にかかる敷居谷古墳群（3、4分墳）発掘調査報告書である。

2. 本調査はカナツ技建工業株式会社から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。

3. 調査の組織は下記のとおりである。

依頼者 カナツ技建工業株式会社

代表取締役 金津 敬

主体者 松江市教育委員会

事務局 教育長 要訪秀富

生涯学習部長 中西宏次

文化課長 中林俊

文化財係長 署崎雄二郎

実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課

理事長 大塚雄史

事務局長 佐藤千代光

調査係長 中尾秀信

調査者

3号墳 調査担当者 飯塚 康行（平成6年1月～平成6年3月）

調査補助員 富田 茂雄（平成6年1月～平成6年3月）

4号墳 調査担当者 金山 正樹（平成6年4月～）

調査補助員 稲田 梨（平成6年4月～）

4. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導（協力）を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

金津 敬（カナツ技建工業株式会社代表取締役）、金津任紀（同専務取締役）、上田 勉（同取締役土木工事部長）、森脇凱人（同営業部次長）、中村明経（同営業部課長）、高橋利正（同土木工事部課長）、稻田作保（土木工事部主任）、杉原様介（土木工事部工事長）（敬称略）

5. 川土遺物は松江市教育委員会文化課で保管している。

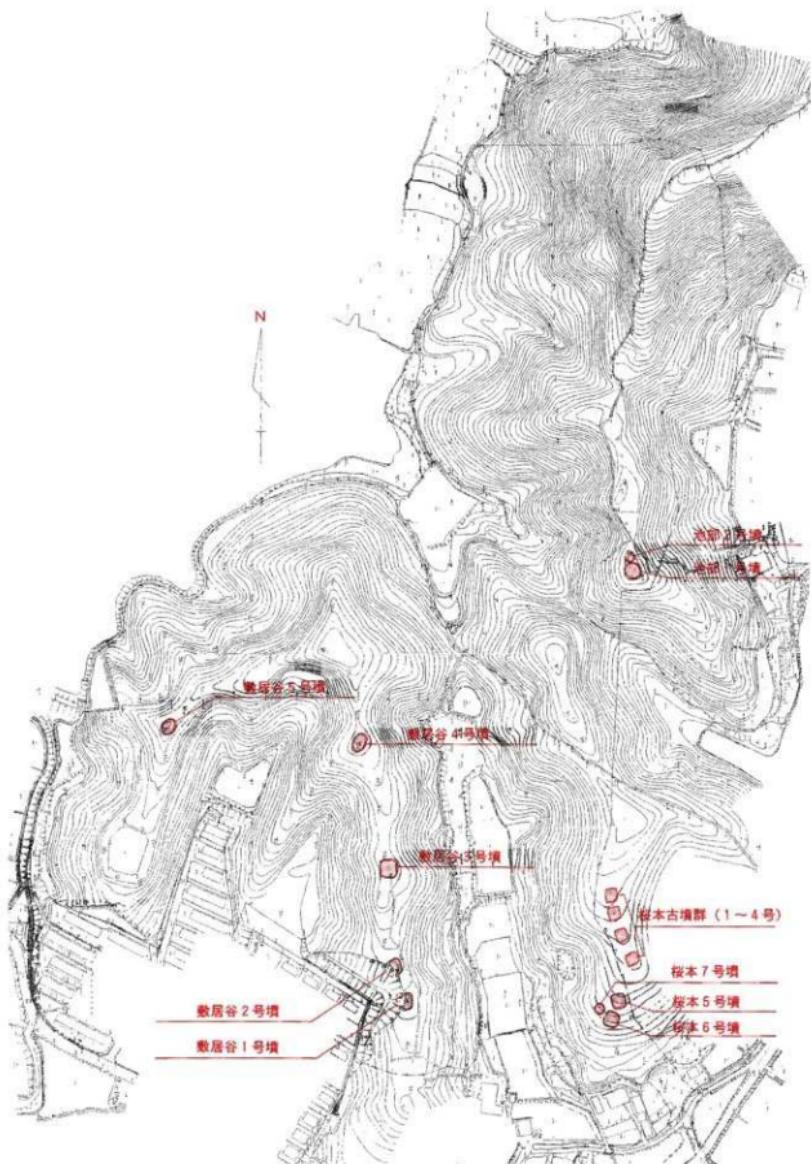
6. 遺物の実測及び写真撮影は稻田が、執筆・編集は金山が行った。



松市内地図

目 次

1. 調査に至る経緯	5
2. 周辺と歴史的環境	5
3. 調査の概要	
(1) 3号墳について	9
(2) 4号墳について	16
4. 結 び	23



第2図 数居谷古墳群全体図

I. 調査に至る経緯

敷居谷古墳群は松江市街地北方、東牛馬町の低丘陵上に所在する方墳5基からなる古墳群である。本遺跡は、本区域においてカナツ技建工業株式会社が住宅団地の造成を計画した際に分布調査の結果発見された。本区域において造成工事は平成5年から進行中であり、平成5年度において占墳群中1、2、3、5号墳、平成6年度において残りの4号墳の発掘調査をそれぞれ実施することとなった。

II. 周辺の歴史的環境

敷居谷古墳群は、松江市街地より北西方向の東牛馬町字敷居谷に所在する。

生馬の地名の起こりは「出雲国風土記」の中に見られる生馬神社の祭神、八尋鎌長依彦命の詔に由来するもので、「吾が御心、平明にして憤まず」から取られたものであると言われており、この里が平和で明るい土地であったことを窺わせるものである。

本遺跡周辺の遺跡に眼を転じると、遺跡の数は近年の分布調査の成果により増加してきたものの、西方の古江～浜佐陀地区、東方の法吉地区ほど大規模な古墳や日立った遺跡はないようと思われる。

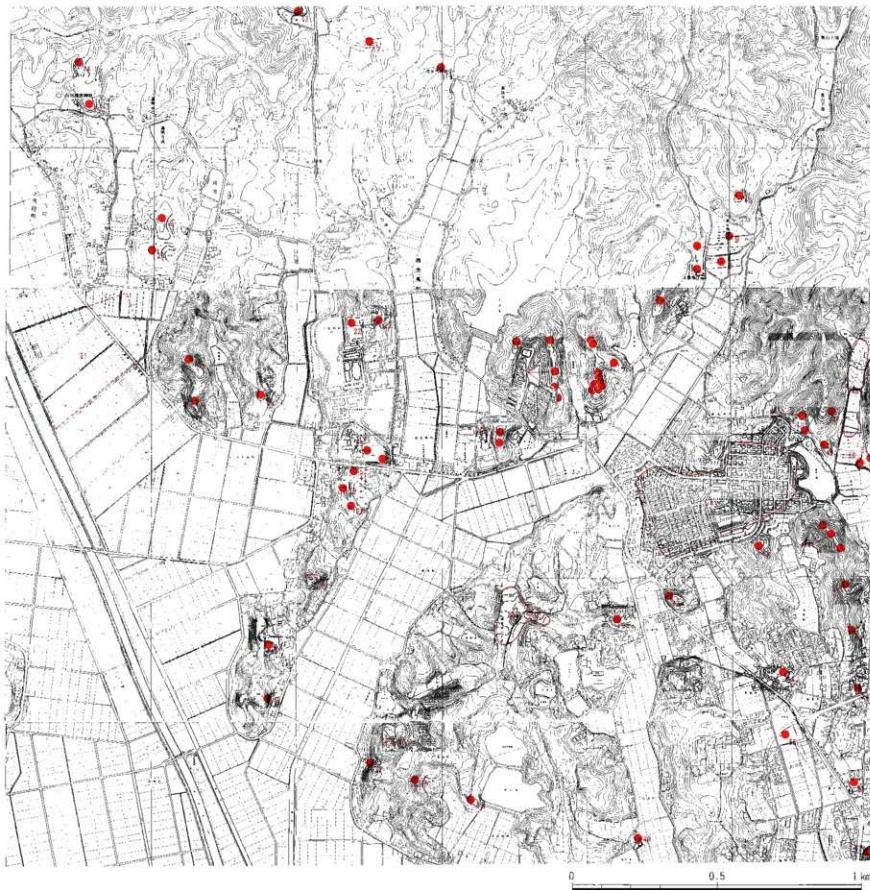
生馬地区の遺跡を辿ってみると、まず縄文時代の遺跡は現在までの時点では確認されておらず、弥生時代に入ってから人々の生活の営みの跡を窺うことができる。すなわち、「元井手遺跡」(No.23)、「名尾遺跡」(No.25)である。いずれも散布地として周知されている遺跡で、弥生土器片が採集されているが、遺構に伴うものではないことが惜しまれる。

統く古墳時代に入ると、この地には古墳や横穴墓が數多く見られるが、いずれも小規模な古墳で平野を望む小高い丘陵の尾根筋上を利用して築造されている。このうち概要の知られるものは少ないが、「かいつき山古墳」(No.26)では内部施設に礎石を持つもの、「名尾丘古墳」(No.24)では埴輪を持つもの、「桜木古墳」(No.4)では横穴式石室を持つことが知られている。この時期の住居跡は知られていないが、「東牛馬遺跡」(No.7)、「宮ノ下遺跡」(No.9)などの山裾の散布地から須恵器片が発見されているため、付近の山の緩斜面を利用した人々の生活があったものと推定される。また、「平遺跡」(No.6)では、土作りに使用する筋砥石が祀られており、玉作り工人の存在する可能性も考えられる。

古墳時代以降になると、遺跡の数は少なくなるが、「平ノ前廃寺」(No.8)から新丸瓦、「荒張古墳群」(No.20)から五輪塔、「かいつき山古墳」(No.26)の墳頂部で宝筐印塔相輪部と礎敷きの基壇が発見されている程度である。

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	名 称	所在地	種別	概	要
1	敷 屋 谷 古 墳 群	東生馬町 古墳群	方墳 4基、円墳 1基		
2	桜 木 古 墳 群	" "	方墳 7基、円墳 1基		
3	池 部 古 墳 群	" "	円墳 2基		
4	移 本 古 墳	" 古 墳	横穴式石室、直刀、上器、(別称) ガランサン古墳		
5	法 恩 寺 遺跡	" 敷地	散布地	石斧	
6	平 遺 跡	" "	筋紙石 1(記ってある)		
7	東 牛 馬 遺 跡	" "		須恵器片	
8	半 ノ 前 麓 寺	" 宗院跡		柱穴、軒丸瓦	
9	宮 ノ 下 遺 跡	" "		散布地	須恵器片
10	邊 田 横 穴 群	" "	横穴群	土製支脚	
11	大 人 宮 遺 跡	西牛馬町 敷地	石斧		
12	郷 戸 横 穴 群	" "	横穴群		
13	後 谷 横 穴 群	" "	" 5穴(4穴消滅)		
14	か ね じ ぎ 横 穴 群	上佐陀町	" 2穴		
15	義 塚 古 墳	" 古 墳		円墳	
16	皆 美 山 1号 墳	下佐陀町	" "	円墳	
17	皆 美 山 2号 墳	" "		地形不明、石棺 1、須恵器片、(消滅)	
18	松 櫻 古 墳 群	" 古 墳群	古墳群	方墳 2基、円墳 1基、須恵器片(消滅)	
19	荒 張 古 墳	西生馬町 古 墳	古 墳	方墳	
20	荒 張 古 墳	" "	古墳群	五輪塔、石棺	
21	佐陀川流域条項制遺跡	" "	多甲湖	消滅	
22	高 尚 敷 地 内 古 墳 群	" 古 墳 群	方墳群	方墳 3基、(消滅)	
23	元 井 手 遺 跡	" 敷地	散布地	弥生土器片	
24	名 尾 丘 古 境	" 古 境		古 境 方壇、櫛輪、土鏡器、(消滅)	
25	名 尾 遺 跡	" 敷地		弥生土器片	
26	か い つ き 山 古 墓 群	東牛馬町 古墳群	方墳 2基、櫛輪、土鏡器、(消滅)		
27	名 尾 犬 神 古 境	" 古 境		円墳	
28	大 北 古 境	" "		方墳	
29	L 36 古 境	" "		方墳	
30	高 樹 城 遺 跡	" 城 遺 跡		山城	
31	北 墓 古 境	" 古 境		方墳	
32	船 沼 横 穴	" 横 穴	4穴以上(半廻)		
33	ゴ ル フ 場 内 古 墳 群	比津町 古墳群	古墳群	3基以上(消滅)	
34	ゴ ル フ 場 内 横 穴 群	" "	横穴群	(消滅)	
35	水 附 岩 横 穴 群	" "	" 5穴、須恵器(半廻)		
36	西 跡 山 古 境	比津町 城 墓	城 墓	山城	
37	東 前 横 穴 群	武佐陀町 横穴群			
38	殿 山 横 穴 群	" "		刀子、須恵器	
39	小 海 谷 横 穴 群	" "		2穴、刀、人骨、須恵器、(消滅)	
40	比 津 小 丸 山 古 境	比津町 古 境	前方後円墳		
41	月 烈 古 境 群	" 古墳群	方墳等半21基、石棺、櫛輪、熊電鉄、玉類、埴輪、铁器、(消滅)		
42	ひ ま く だ 横 穴	" 横 穴	4穴式姿入、家形石棺		
43	久 水 遺 跡	比津町 敷地		須恵器片	
44	久 水 古 境 群	" 古 境 群	方墳群	方墳 3基	
45	唐 梅 古 境 群	" "		方墳 4基	
46	田 中 谷 古 境 群	" "		前方後円墳 1、方墳 1	
47	下 り 松 遺 跡	" 家		須恵器	
48	田 中 谷 遺 跡	" 敷地		弥生式土器、須恵器、石斧	
49	貴 田 虎 一郎 宅 上 古 境 群	" 古墳群	円墳 2基		
50	暁 山 古 境	" 古 境	方墳、円墳埴輪		
51	下 り 松 遺 跡	" 敷地		弥生土器	
52	石 在 群	" 磐 墳		一石一字群	
53	中 代 遺 跡	春 日 町 敷地		石鏡、土鏡器	
54	比 津 が 岐 横 穴 群	" 横穴群		須恵器、(消滅)	
55	春 日 遺 跡	" 敷地		弥生土器片	
56	淡 千 番 山 横 穴 群	" 横穴群		上鏡器、須恵器、(消滅)	
57	摩 利 寺 大 山 横 穴	" 横 穴			



第3図 周辺の遺跡分布図

III. 調査の概要

(1) 3号墳について

本墳は、1、2号墳が位置する丘陵尾根筋上を2号墳から北方へ約60m離てた標高約36mを測る位置に所在し、調査前は一辺約11mを測る方墳であると推定された。

3号墳の調査は土層観察用の畦を墳丘を十字に切る形で設定して掘り下げた。

ア) 墳丘について

調査の結果、南北長12m、東西長12m、墳裾からの比高最大1.4mを測る方墳であることが判明した。墳丘の築造方法は、まず地山面から周溝を掘り、12m四方の墳丘基礎を形成し、旧表土面上に盛土を施して墳頂部に南北6.0m、東西5.5mの平坦面を造る。最大盛土高は墳丘中心部で約60cmを測る。盛土は周囲の地山を削って使用したものと考えられるが、非常に粘性の強い土質である。

イ) 周溝について

周溝は西辺部を除く各辺で検出された。この周溝は幅1.4~2.2m、深さ10~40cmを測る。このうち東辺部墳裾は、調査前は山路となっており、既に円状の地形を呈し、掘り下げてもほとんど埋土はなく、表土下はすぐ地山であったが、本来は同位置に周溝があったものと推定される。

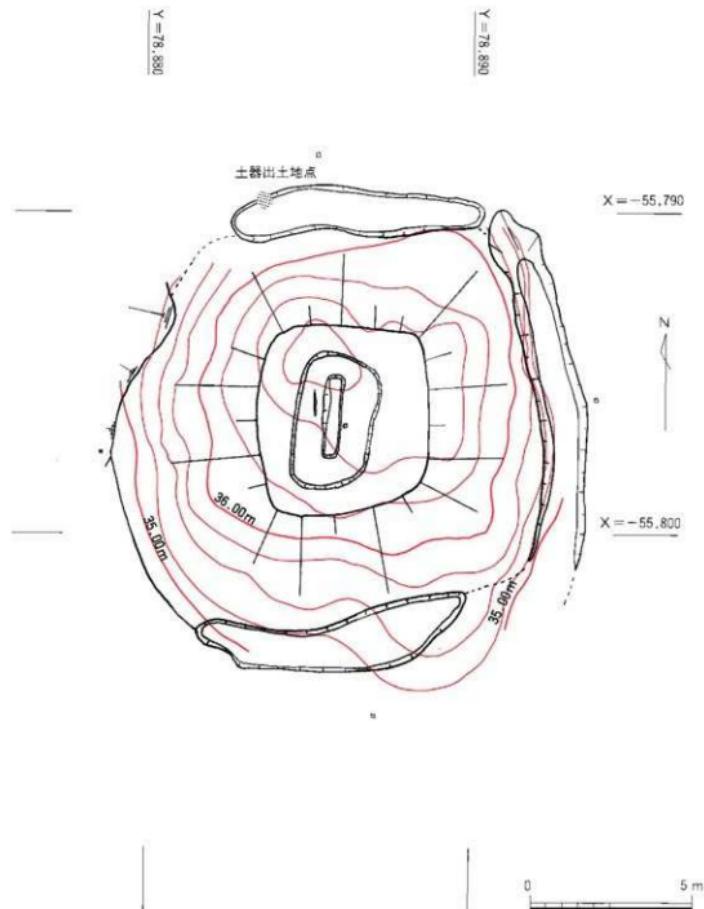
その他の周溝内には淡黒褐色の堆積土が見られ、北側周溝北肩部から溝底にかけて土師器の高杯が7個体と杯2個体、器種不明の須恵器片3片が検出された。土師器は軟質化しており、取り上げ時に細片となつたために、完全には復元できなかつたが、1ヶ所に集中して検出され、破片の散乱も見られなかつたため、本来この位置に供献されたものであると考えられる。またNo.7高杯以外の土師器には全て赤色顔料の付着が見られ、当初は鮮やかに塗彩されていたものと考えられる。

ウ) 主体部について

墳裾中心部において表土を除去した段階で、南北長3.1m、東西幅35~70cmを測るやや不整形な黒褐色土の充満したプランが検出された。当初これが主体部かと思われたので内部を掘り下げた結果、深さ20~25cmを測るものであった。遺物は検出されず、土壤の底はU字形となり、黄褐色の土色となつた。底を更に掘り下げるに伴う土色が変化し、淡黒灰色の土層となつた。この肩巾からは刀子の破片(No.3~10刀子A)が検出されたため、この土層が棺内部の堆積土で、当初見られた黒褐色土層は下の木棺が腐食した際に覆土が落ち込み、そこに腐葉土等が堆積してできた層であることが判明した。

この時点では墳頂部盛土を全体に一層除去すると、南北4.5m、東西2.5mを測る四角形の墓壙掘り方のプランが検出された。プラン内には黄褐色土の中に白いブロックを含む土が充満していた。このプラン内について、木棺の痕跡を検出すべく均一に約10cm掘り下げた結果、墓壙掘り方と主軸を同じ

くして南北長2.75m、東西幅55~65cmを測る長方形の木棺痕跡が検出され、淡黒灰色の土が堆積していた。さらに木棺痕跡のプランを検出した同レベルにおいて、木棺から西方へ25cm離れた地点の墓壙掘り方内部に木棺に並行して切先を南へ向け、刃部を外側に、背部を棺側に向けて全長90.3cmを測る直刀（№3-11）が1振置かれていた。この直刀は出土したレベルが木棺上部とほぼ同じであること



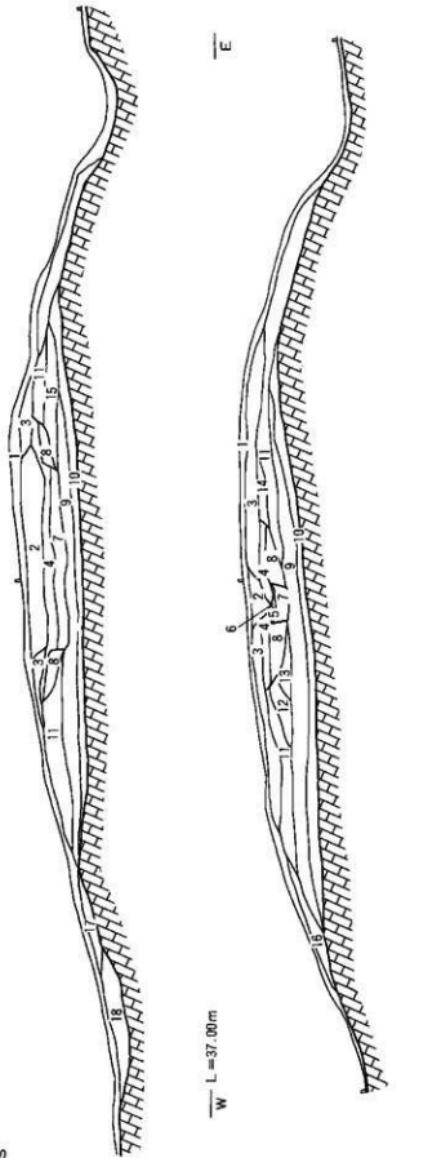
第4図 敷居谷3号墳調査前及び調査成果図

N

S L=37.00m

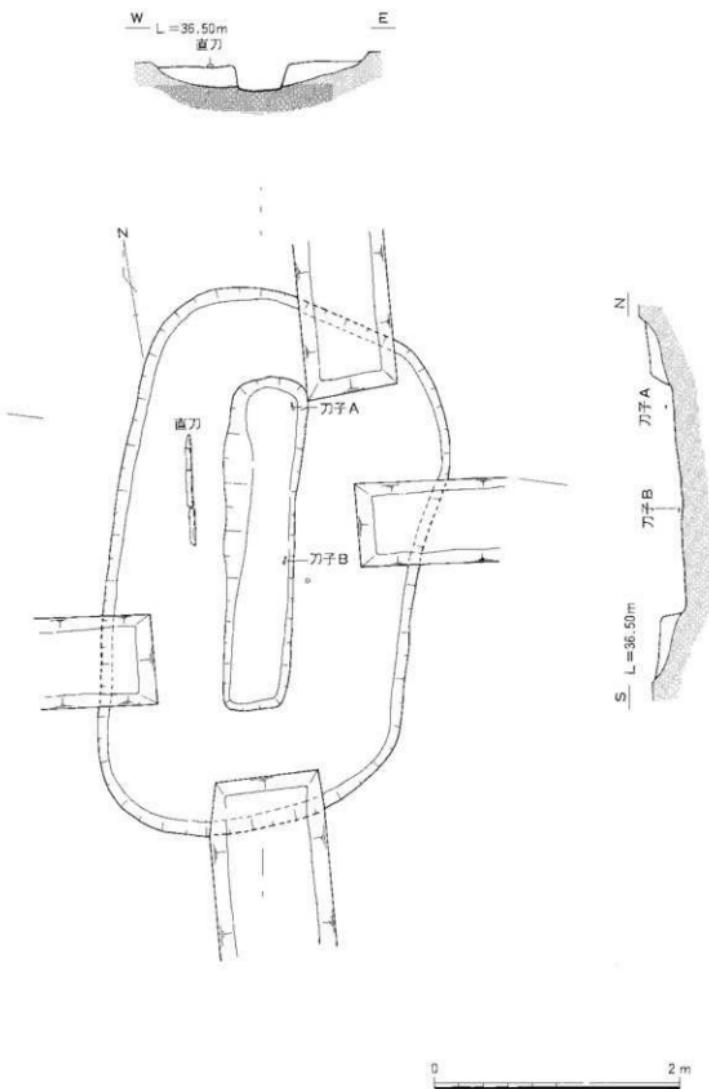
E

W L=37.00m



1. 粘土
2. 黑褐色土
3. 淡黄褐色粘质土
4. 淡褐灰色粘质土
5. 黑褐色土（より薄い色）
6. 黄褐色土
7. 淡黄灰色土
8. 黄褐色粘质土（白色土塊入）
9. 淡黄褐色土
10. 旧表土
11. 淡黄褐色粘质土（白色ブロック含む）
12. 淡褐色土
13. 明黄褐色粘质土（白色ブロック含む）
14. 淡黄灰色粘质土（白色ブロック含む）
15. 淡黄褐色粘质土
16. 淡黄灰色粘质土
17. 淡黄灰色粘质土
18. 淡黄灰色粘质土
19. 淡黄褐色土

第5図 敷居谷3号堆積丘土層断面図



第6図 3号墳主体部平面図

から、埋葬の際に墳丘盛土上から小判形の墓壙を掘り込み、木棺を安置した後、木棺上部まで埋め戻した時点で直刀を棺外に副葬した後墓壙掘り形上面までを更に土で埋め戻したという状況が窺われる。

棺内部については、堆積土を除去すると、当初に検出されていた刀子の他にもう1片刀子片（No10 刀子B）が木棺中心部の棺底で東側に寄せて検出された。なお、刀子Aと刀子Bは遺物整理時に接合して1個体となることが分かったため、副葬に際して刀子を2つに折って2箇所に納めたことが考えられる。木棺の深さは最終的に最大28cmの深さを測り、また北側が幅広であることと、直刀の切先が南方を向いていることから、頭位は北方を向いていたであろうことが推定された。

調査後の主体部断ち割り時点で判明したことは、墓壙掘り方の底は木棺底部のレベルよりやや高いことであり、墓壙を掘り込んだ際に木棺を安置する部分をいわゆる2段掘り風に少し掘り窪め、木棺の安定を図ったものであろうと推定される。

二) 出土遺物について

3号墳からの出土遺物は、北側周溝からの土師器と須恵器、主体部からの鉄製品である。

No3-1は北側周溝から検出された土師器の高環である。口径12.2cm、底径8.6cm、器高10.0cmを測る。内湾する口縁部と短く聞く脚部を持ち、环底部から脚部にかけての外面及び环部内面に若干の赤色顔料が残る。

No3-2は北側周溝から検出された土師器の高環である。口径8.5cm、底径8.5cm、器高9.1cmを測る。内湾する口縁部と短く聞く脚部を持ち、环部外面及び环部内面の一部に若干の赤色顔料が残る。

No3-3は北側周溝から検出された土師器の高環である。口径12.7cm、底径6.8cm、器高8.5cmを測る。やや内湾気味の口縁部と短く聞く脚部を持ち、内外面をヨコナデで仕上げる。赤色顔料の付着は見られない。

No3-4は北側周溝から検出された土師器の环である。出土時にはNo3高环の环部内面に重なった状態で検出された。口径12.7cm、器高5.1cmを測り、やや内湾気味の口縁部を持つ。内外面ともに赤色塗彩され、顔料は良好な状態で残存している。

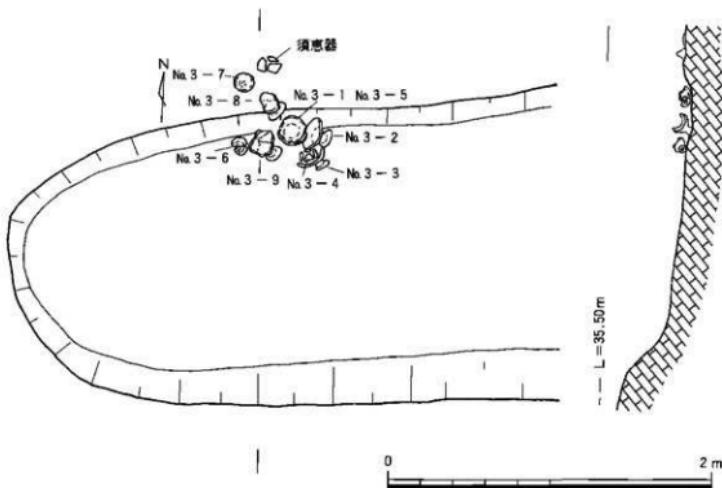
No3-5は北側周溝から検出された土師器の环である。出土時にはNo1高环の环部内面に重なった状態で検出された。口径、器高は共に不明であるが、恐らくNo4と同じ形態を持つものである。内外面に一部赤色顔料の付着が見られる。

No3-6は北側周溝から検出された土師器の高环脚部片である。底径8.6cmを測り、短く聞く脚部であり、恐らくは内湾する口縁部を持つものである。外面に一部赤色顔料の付着が見られる。

No3-7は北側周溝から検出された土師器の高环脚部片である。底径8.0cmを測り、短く聞く脚部であり、恐らくは内湾する口縁部を持つものである。内外面に一部赤色顔料の付着が見られる。

No3-8は北側周溝から検出された土師器の高环脚部片である。底径8.8cmを測り、短く聞く脚部であり、恐らく内湾する口縁部を持つものである。外面に一部赤色顔料の付着が見られる。

No3-9は北側周溝から検出された土師器の高环である。底径8.2cmを測り、环部は欠損する。脚部は短く開き、环部は内湾して伸びるものと思われる。环部内面及び脚部外面に一部赤色顔料の付着が見られる。

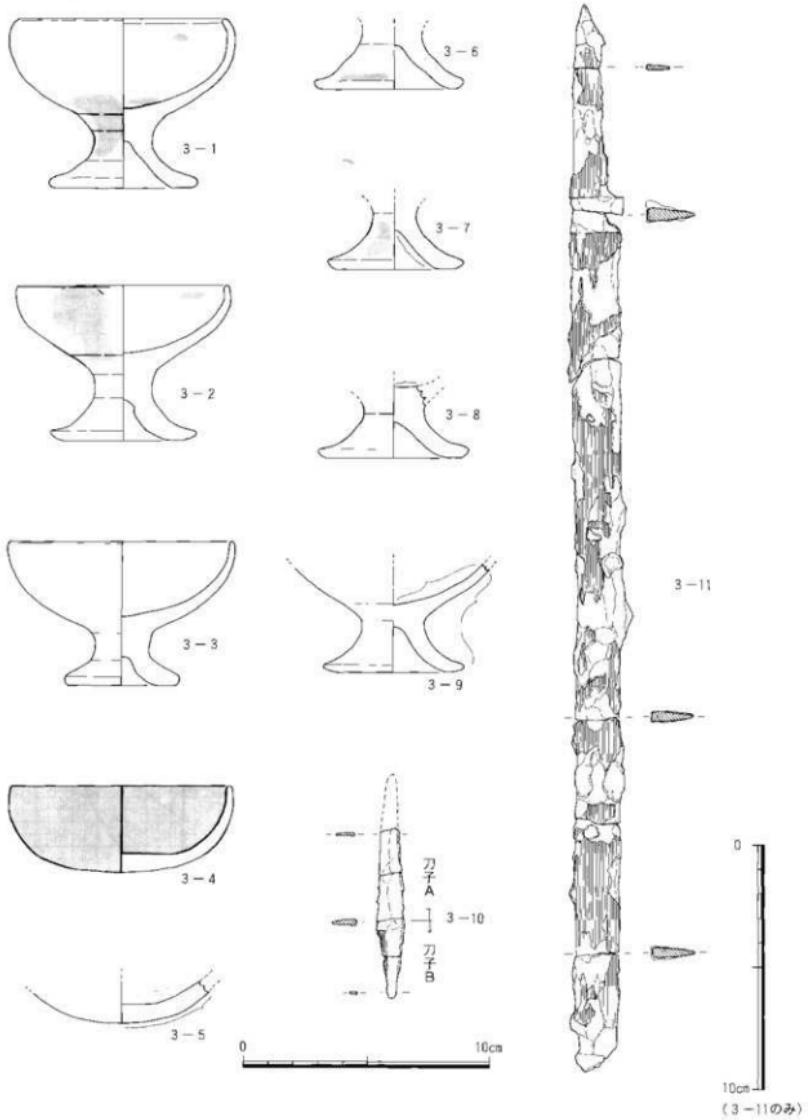


第7図 3号墳北側周溝土器出土状況

No. 3-10は主体部棺底から検出された鉄製刀子である。調査時に棺内北側で検出された刀子Aと棺内中央部で検出された刀子Bが接合して1個体となったものである。刃先は欠損しており、残存長10cm、最大刃幅1.5cmを測る。把手部分には若干の木質が残る。

No. 3-11は墓壇内で棺外西側に並行して供獻されていた直刀である。全長90.3cm、最大刃幅4.0cmを測る長大なものである。全体に木質が良く遺存しており、木製の鞘に納められていたものと思われる。

図版No. 3-12は北側周溝から検出された須恵器細片である。十輪器高杯群に北接して3片検出された。器種は不明で、接合するものはなかった。内外面ともにナデで仕上げており、内面に指痕を残すものもある。



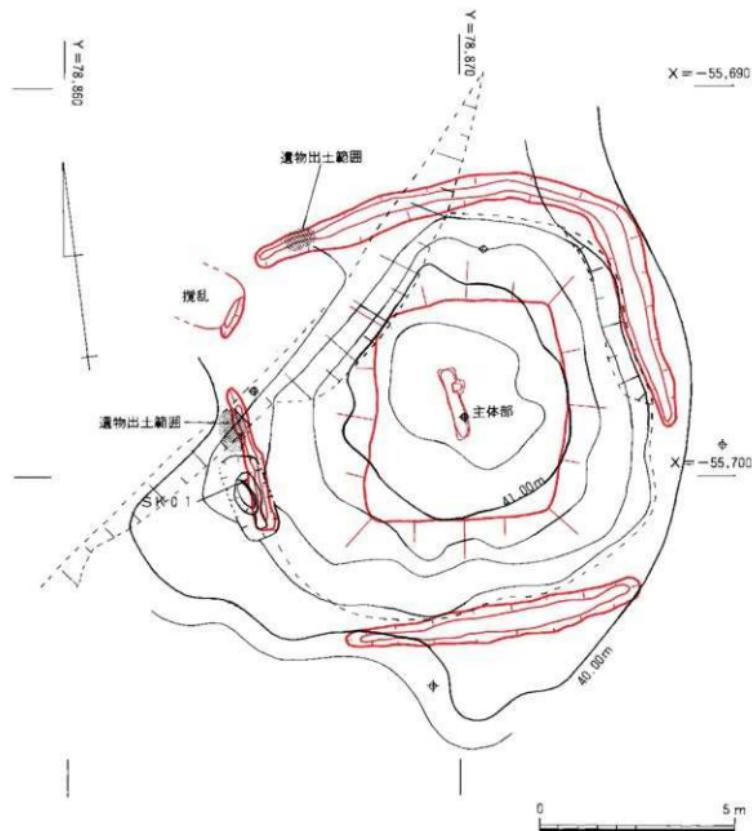
第8図 3号墳出土遺物実測図 縮尺1/2 (1-10), 縮尺1/4 (10)

(2) 4号墳について

本墳は松江市東生馬町字敷居谷774、775-2を所在地とし南北を縦断する標高約40mの低丘陵尾根筋上で本古墳群中最高所に位置している。

発見時点には墳塚の北東、北西側の盛土が一部既に失われていたが、残存している墳丘状況から一辺約8mの円墳であるものと推定された。

調査は本墳が位置する尾根筋に平行と直行に合わせた幅50cm前後の土層観察用の畦を設定して実施した。



第9図 敷居谷4号墳調査前及び調査成果図

ア) 墳丘について

調査の結果、一辺9m四方、高さは墳頂からの最大比高差で1.5mの墳丘を持ち、墳頂部に一辺5m四方の平坦面をそれぞれ形成している。

墳丘の築成方法を土層観察用の畦から考察すると黄褐色土層の下に暗黄褐色有機質土層が確認され、それが旧表上面であり、この暗黄褐色土の下は地山である。盛土が地山に非常によく似た土色・土質であることから旧表土面上に周囲を削って得た土を盛って墳丘を築成したものと考えられる。最大盛土高は墳丘中心部で60cmを測る。

イ) 周溝について

本墳も1、2、3、5号墳と同様に周囲に地山面を加工して上端幅0.6~1.2m、深さ24~30cmの周溝をめぐらし墳域を画したものと思われるが、墳域北西部及び南東部が削平されており、この部分においては周溝は確認できなかった。

溝底から30cm上までは暗褐色土～黒褐色土層が確認され、後世に堆積した土層と思われる。また周溝北側底部より丹塗りを施した土師器の高杯5個体が検出され、祭祀儀礼に用いられた供献土器と考えられる。

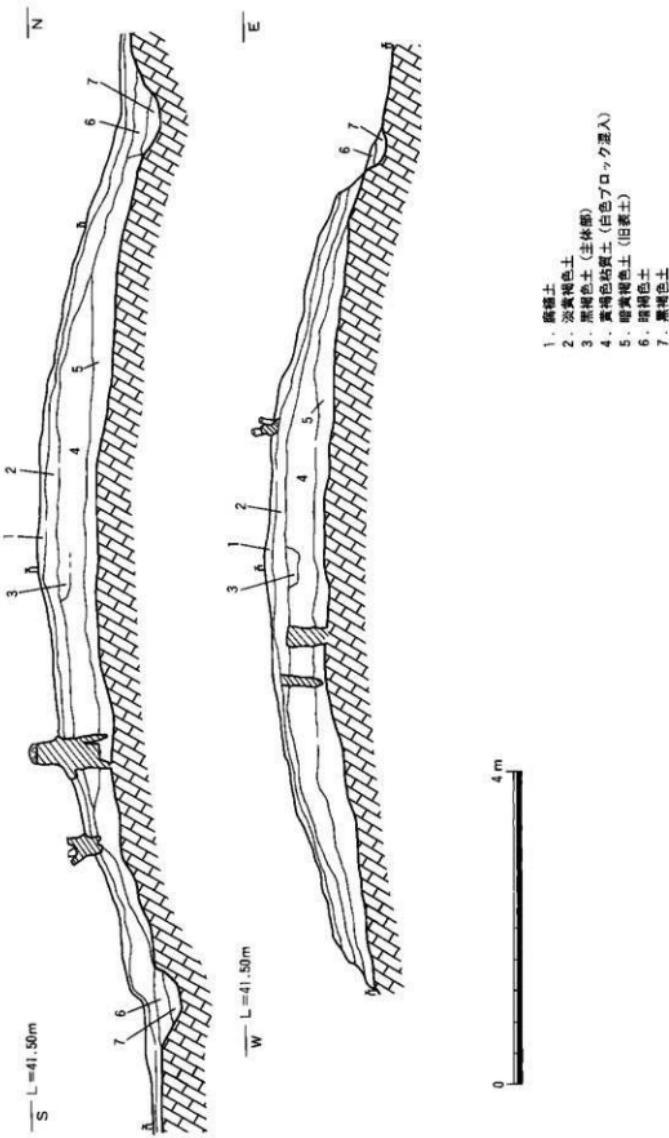
ウ) 主体部について

墳頂中央部において墳丘第2層（淡黄褐色土）を除去したところ主体部上端面に達した。主軸をほぼ南北方向にとり、北端幅40cm、南端幅30cm、南北長1.9m、深さ20cmを測る隅円長方形状の土壙が検出された。土壙内には黒褐色土が堆積しており、木棺が腐朽し、覆土が落ち込んだ上に有機物が腐植して堆積したものと思われる。主体部内から遺物は検出されなかった。また主体部調査終了後、主体部の断剗りを行ったところ黄褐色土層（白色ブロック混入）が、その下より暗黄褐色土層（旧表土）がそれぞれ確認された。これらのことから埋葬施設は木棺直葬で、北端幅が南端幅よりやや広いことから埋葬者の頭を北方向に置いたものと思われる。

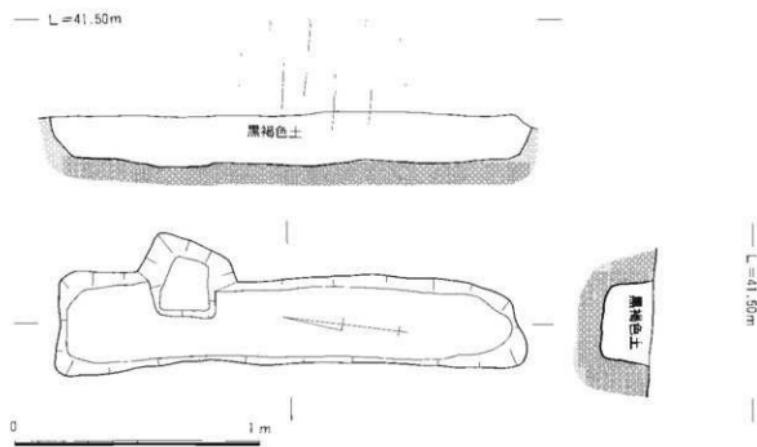
エ) 石組遺構について

墳頂西側周溝上より長さ2.6m、幅1m、深さ20cmを測り、主体部同様主軸をほぼ南北にとる石組遺構が検出された。土壙四壁内側に沿って河原石が配列され、その殆どが二段構造になっている。

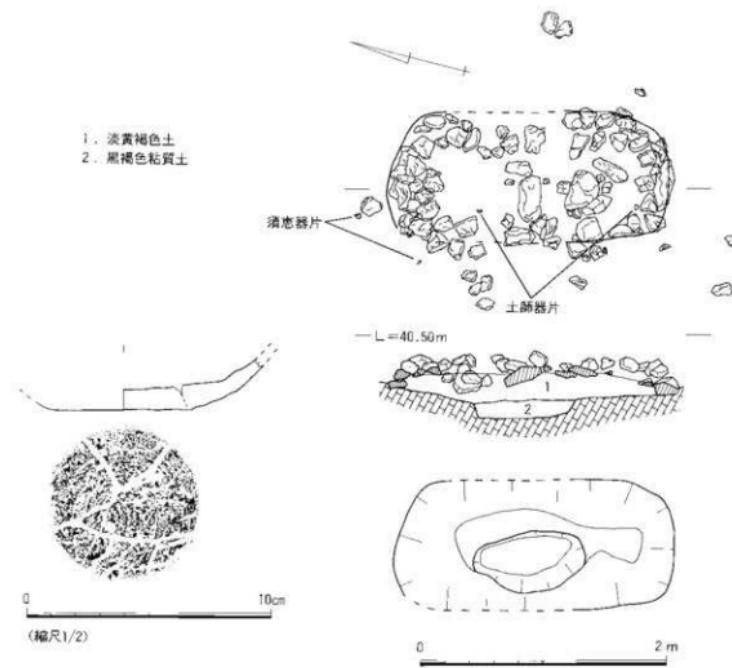
また、北壁側に拳大の石が多く配列されて「寧な造り」が見受けられる。これらの配石は土壙底面まで達していない。土壙中央部の上面には人頭大の川石が配されているが用途は不明である。内部より土師器・須恵器細片が数点出土している。底面から黒褐色土層内から遺物は出土しなかった。この遺構が検出された同レベル北側において須恵器細片が出土している。石組遺構同様周溝上より出土していることから古墳築成時より後世に祭祀儀礼に使った祭具土器として使用したのではないかと推測する。これらの要因から本墳の主と特別な関係にあったものがここに埋葬されているものと思われる。



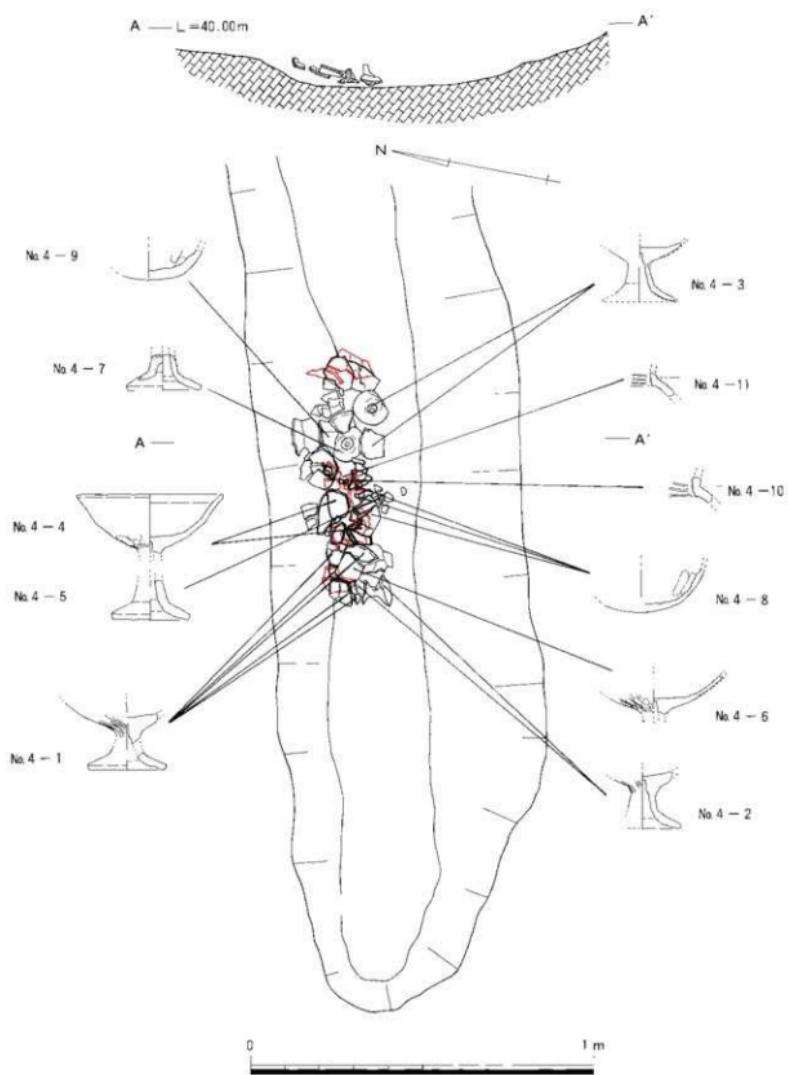
第10図 磐居谷4号填 填丘土層断面図



第11図 4号墳主体部平面実測図



第12図 石組遺構平面実測図と遺物実測図



第13図 周溝内遺物出土状況平面実測図



第14図 土器群出土状況平面実測図

オ) 出土遺物について

第15図 No.4-1~5は北側周溝より出土した古式土師器の高杯である。

No.4-1は底径8.0cm、残存高7.9cmを測る。杯部と脚部との接合部内面に径5mm、深さ1.8mmの刺突痕を持つ。

No.4-2は復元底径9.0cm、残存高6.6cmを測る。杯部と脚部との接合部内面に径7mm、深さ1.5cmの刺突痕を持つ。

No.4-3は残存高6.7cmを測る。杯部と脚部との接合部内面に径6mm、深さ1.2cmの刺突痕を持つ。風化が著しく調整は不明。

No.4-4、5は復元口径16.8cm、底径8.5cmを測る。杯部と脚部との接合部内面に径6mm、深さ1.2cmの刺突痕を持ち、脚部内面に丹塗りが施してある。

No.4-6、7は復元底径9.0cmを測る。杯部と脚部との接合部内面に径7mm、深さ1.5cmの刺突痕を持つ。

共通する形態的特徴は杯部が半球形を呈することと、杯部と脚部の接合部内面に径6mm前後、深さ1.5cm前後の刺突痕を持つことである。全体に風化しており杯部と脚部の接合部外面上に放射状の刷毛目が微かに観察することができる。No.4-3を除く各個の脚部は器高が厚く、端部は平坦面をなす。

No.4-4~5、6~7の杯部と脚部とは接合できなかったので正確な脚高は割出せなかつたが、No.4-1~3の脚高はほぼ5cm前後である。このことから、これらの高杯は脚高を統一した規格品として製作されたとも推定でき、形態的特徴から大束式に比定される。

No.4-8、9は杯で焼成は不良で風化が著しいが、内面に指頭圧痕を残す。

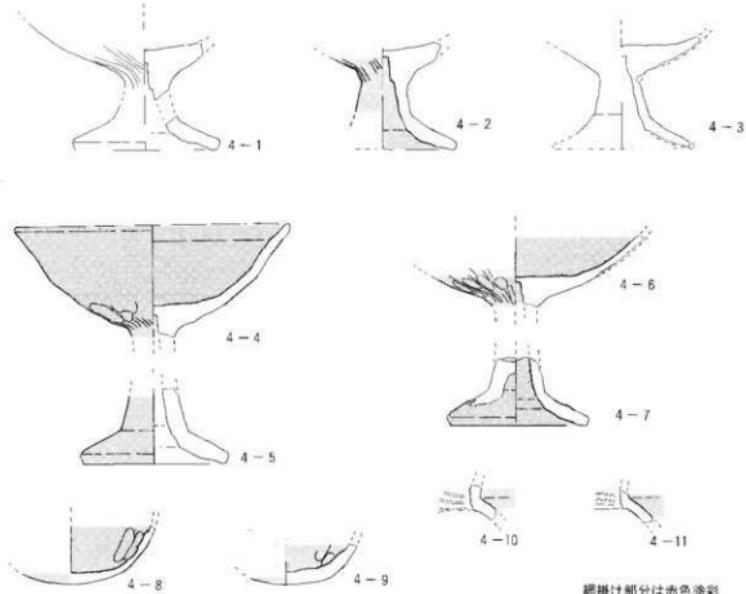
No.4-10、11は壺頸部で焼成は不良で風化が著しいが、内面に沈線を施す。

第16図 No.4-12~16は西側周溝の上位置より出土した須恵器の無高台杯と甕片である。

No.4-12は復元口径12.8cm、復元底径7.2cm、器高3.7cmを測る高台杯。底部外面上に糸切り痕を有し、体部は内凹して上り、口縁部はほぼ直線的に伸び、端部付近に窪みを施し、端部を丸くおさめる。

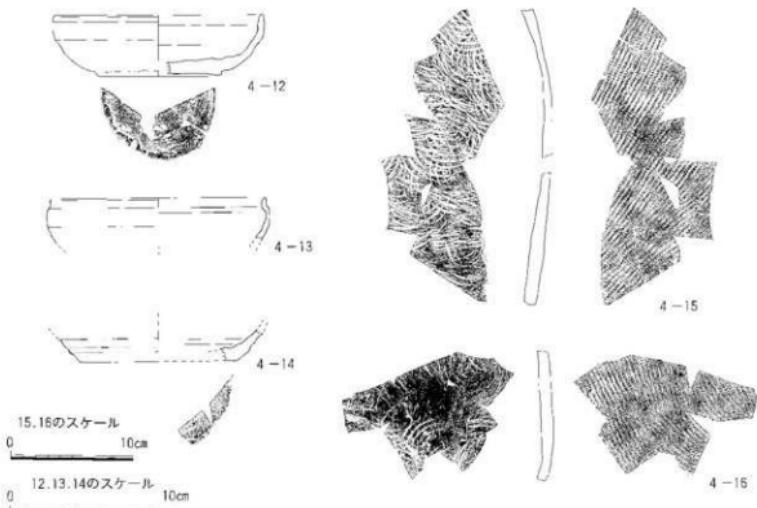
No.4-13は復元口径12.8cm、No.4-14は復元底径9.2を測る無高台杯である。調整・手法はNo.4-12とほぼ同様のものと思われる。

No.4-15、16は甕片。ともに外面に平行印き、内面に円弧印きを施す。



第15図 周溝内出土遺物実測図（縮尺1/3）

0 10cm



第16図 土器群出土遺物実測図

縮尺1/3 (12.13.14) 縮尺1/4 (15.16)

IV. 結　　び

調査の結果、3号墳は一辺12m、4号墳は一辺9mをそれぞれ測る方墳であることが判明した。築造時期については出土遺物出土状況及び年代観、小規模古墳群、埋葬施設等から考察して3号墳については古墳時代後期初頭、4号墳については3号墳よりやや古く古墳時代中期末と考えられる。

敷居谷古墳群は墳丘規模10m前後の方墳で幅0.75～2.4mの周溝を東西南北墳丘裾部に巡らしており、周溝中より供獻土器が検出された特徴から形態的に非常によく似ており、同一集団によって形成されたものと推測する。しかし、1、2、3、5号墳については丘陵斜面に立地しているのに対し、4号墳は丘陵頂部に立地しており、何故4号墳のみ立地条件を他と異にしたかは明らかではない。

主体部に関していえば、4号墳は南北長1.9m、北端幅40cm、南端幅30cmのほぼ南北に主軸をとっており、1、2、5号墳同様素掘りの土壙墓（1号墳は後世擾乱のため詳細不明）で副葬品を作わないのに対し、3号墳についてのみ長大な木棺墓（南北長2.75m、東西幅55～65cm）を擁した2段掘りが行われており、また棺を埋納した段階で棺から西方へ25cm離れた地点より直刀（全長92cm）を一振、棺内に刀子一個体をそれぞれ副葬していることから、3号墳は敷居谷古墳群中においては傑出した存在ではなかったかと考えられる。

4号墳墳裾西側において石組遺構が検出されている。この石組遺構は南北長2.6m、東西幅1mの4号墳主体部同様にはば南北に主軸をとっており、内部より黒褐色の平面プランが検出された。1号墳の主体部については後世擾乱のため詳細は不明であると前述したが、墓壙埋土中より拳火～人頭人の礫が出土しており、1号墳南側墳裾より同じ石材が多数散乱しており、木棺の周開を疊で開んだ礫槽のような埋葬施設だったのではないかという見方からこの石組遺構に何らかの影響を及ぼしたものではないかと推測する。また、この石組遺構北側同レベルにおいて須恵器細片が散乱して出土しており、埋葬に伴う葬送儀礼が行われたものと想像する。

敷居谷古墳群が存在する生馬地区には通称半田尻といふ一区画に条里制の跡がみられることから古代においては農業を生産基盤とした集団が存在していたことが窺われるが、少なからずもこの集団が小規模古墳群に影響を与えたものではないかと推測し、と同時に今後の発掘調査の報告による古代生馬地区の性格の解明を期待するものである。

図 版



奥居谷古墳群遠景（西方より）



奥居谷古墳群全景（北方より）



3号墳調査前（西方より）



3号墳北側周溝内土層堆積状況（東方より）



3号墳北側周溝完掘状況（北方より）



3号墳東側周溝完掘状況（北方より）



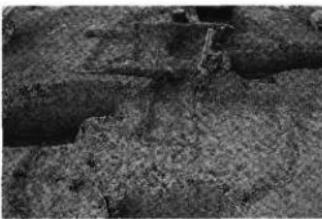
3号墳北側周溝内土器出土状況



3号墳北側周溝内出土高环



3号墳主体部落込土完掘状況（南方より）



3号墳主体部木棺痕跡検出状況（南方より）



3号墳木棺痕跡及び直刀検出状況（西方より）



3号墳出土直刀（南方より）



3号墳出土直刀（西方より）



3号墳主体部棺内半掘状況（南方より）



3号墳主体部完掘状況（南方より）



3号墳主体部完掘状況（北方より）



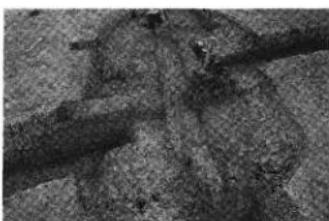
3号墳主体部構内倒壊状況（南方より）



3号墳塹内埋土堆積状況（南方より）



3号墳主体部倒壊状況（北方より）



3号墳基壇倒壊状況（南方より）



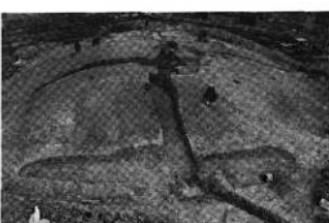
3号墳基壇内倒壊状況（北方より）



3号墳基壇内倒壊状況近景（南方より）



3号墳基壇内倒壊状況近景（東方より）



3号墳調査後全景（北方より）



4号墳調査前近景（西方より）



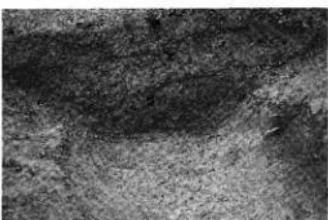
4号墳南側周溝検出状況（南東より）



4号墳西側周溝検出状況（北方より）



4号墳南側周溝内土層堆積状況（北方より）



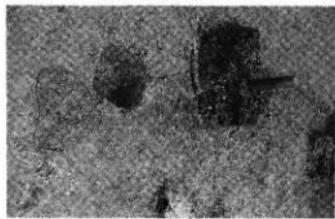
4号墳西側周溝内土層堆積状況（北方より）



4号墳東側周溝完掘状況（北方より）



4号墳西側周溝完掘状況（北方より）



4号墳主体部検出状況（西方より）



4号墳主体部完掘状況（西方より）



4号墳主体部断割り状況（北西より）



4号墳石組遺構内部完掘状況（西方より）



4号墳石組遺構検出状況（西方より）



4号墳石組遺構内部完掘状況（西方より）



4号墳石組遺構内平面プラン検出状況（西方より）



4号墳石組遺構調査後（西方より）



4号墳墳頂西側遺物出土状況（西方より）



4号墳北側周溝内遺物出土状況



4号墳墳丘検出状況（北方より）



4号墳墳丘北側土層状況（西方より）



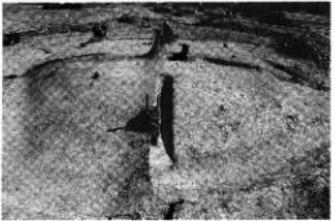
4号墳墳丘西側土層状況（北方より）



4号墳墳丘東側土層状況（南方より）



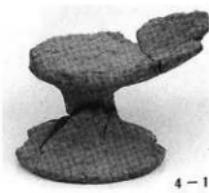
4号墳旧表土検出状況（北方より）



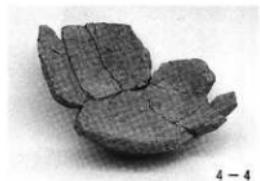
4号墳調査後全景（北方より）



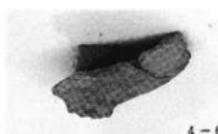
3号填出土遗物



4-1



4-4



4-6



4-2



4-5



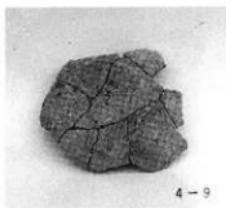
4-7



4-3



4-8



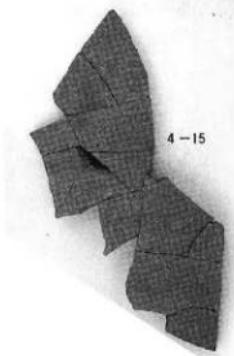
4-9



4-10



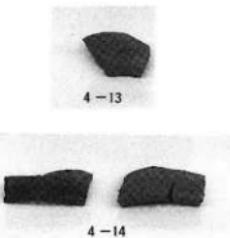
4-11



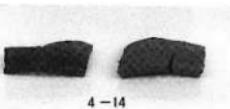
4-15



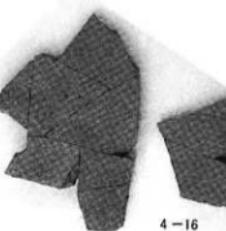
4-12



4-13



4-14



4-16

4号墳出土遺物

敷居谷古墳群発掘調査報告書 2

1995年3月

発行 松江市教育委員会
(財)松江市教育文化振興事業団

印刷 松栄印刷 有限会社
松江市西川津町667-1